

Newsletter Citizen's eyes vol.46

2025年7月27日発行／ジャーナリズムを考える市民連絡会とやま
連絡先 090-8701-6816 <https://civic-journalism.toyama-web.jp>

選挙が映し出す人々の姿

参議院選挙が終わった。嘘とデマで選挙運動をし、日本人ファーストという排外主義的言説を堂々と訴える政党が多く支持を得、議席を獲得する結果となった。ここ10数年来、選挙結果という人々の政治的意に驚きとともに言いようがない、絶望感を、正直感じていた。最近それに加え思い始めているのが、本当にSNSなどで簡単に流されてしまう操作しやすい砂のような大衆に多くの人々がなってしまっているのではないかという不安だ。(お)

メディアが攻撃される時代の中で

大島俊夫

武力攻撃の犠牲となるジャーナリスト

6月16日イスラエル軍がイランの国営放送局を空爆した瞬間をテレビニュースが伝えた。(右がその一部映像)

正当化できない国際法違反のイスラエル軍の数々の軍事行動が中東において拡大し、ますますエスカレートしている実態をさまざまと見せつけられた。

国際NGO「国境なき記者団(以下、RSF)」が発表した、2025年版「世界報道自由度ランキング」では、イスラエルにより軍事占領され、2023年10月からのイスラエル軍によるジェノサイド(大量殺戮)という軍事攻撃を受けているパレスチナの報道の自由度は180か国中163位。その「ガザ地区ではイスラエル軍が報道機関を破壊し、約200人のジャーナリストを殺害し(勤務中43人殺害)、18か月以上にわたりガザ地区を全面封鎖した」と報告している。

一方のイスラエルの報道の自由度は自国の報道機関への弾圧を続けており、180か国中112位となっている。

※参考 / 武力紛争下の報道記者・ジャーナリストの保護
(文民条約／戦時における文民の保護に関する1949年8月1日のジュネーブ条約 第四条約79条)

自国政府の発行するジャーナリストとしての身分証明証の携帯により文民として一定の保護が保障され、紛争当事国の軍事行動の直接の対象とされないとされている。(参考:「軍縮条約・資料集第二版」(有信堂)、「国際人道法 再増補」(有信堂)

アメリカ トランプ大統領の主要メディアへの攻撃

トランプ大統領は1期目の政権時からメディア攻撃が有名だ。メディア報道をフェークニュースと批判しジャーナリストを「国民の敵」と攻撃。それに対抗するアメリカの報道機関が300社以上が報道の自由を訴えるキャンペーンを実施した。

二期目となるトランプ大統領は、今年2月にはメキシコ湾の名称をアメリカ湾とする大統領令に従わなかつたAP通信に対し大統領執務室での取材を禁止、3月



14日、連邦政府が出資するニュース組織「ボイス・オブ・アメリカ(VOA)」をVOAが「反トランプ的」で「過激」だと非難し、縮小する命令に署名した。

今年7月には、「RSFはトランプ大統領は就任以来、メディアに対し『権威主義的な』攻撃を続け、世界的な報道弾圧を煽動していると非難した」(出典:時事7/18)。

日本におけるメディアへの攻撃

限られたスペースで、すべてを書けないが、2010年代からの主なメディア攻撃をあげると…。

2014年福島原発吉田調査報道と慰安婦報道検証で朝日新聞バッシング(15年より慰安婦報道では朝日新聞相手に集団訴訟も)2015年百田尚樹氏は自民党勉強会での「沖縄の2つの新聞はつぶさないといけない」と発言

2016年高市早苗総務大臣が放送法違反による電波停止命令を是認すると発言

2017年政権を追及する記者へのバッシング報道……

その他、ジャーナリストに対するインターネット上の脅迫・恐喝など誹謗中傷が深刻化。TBS報道特集への攻撃等(地平7月号参照)。この状況を受け、日本新聞協会は、6月「記者等への不当な攻撃に対する声明を発表した。

以上、メディアを取り巻く状況は厳しさを増しているのが実情だ。ますます報道関係者に覚悟が求められる時代になっている。読者・視聴者としてできることは?

ドキュメンタリー映画の現在

甲田 克志

テレビと映画の垣根がますます低くなっている。東海テレビ製作の「人生フルーツ」が映画館動員数で28万人を記録したのが2017年。富山のほとり座で見たのだが、90歳に近い建築家の夫が家の造作を器用にこなし、料理好きな妻は日々おいしい手料理を食卓にのせる。幸せを絵に描いた暮らしの中で、夫はある朝、眠るように亡くなり、妻も自然に夫の死を受け入れる。こんな死に方をしたいものだと思った。ローカル局の才能が、全国相手の映画館上映で数億円稼ぎ出すという驚きの発想だ。富山チューリップテレビの五百旗頭幸男が富山市議会の政務活動費の不正を追った「はりばて」がこれに続き、石川テレビに転じた五百旗頭は今「能登デモクラシー」を世に問うている。

月刊誌「創」7月号は「ドキュメンタリー映画の現在」と銘打って特集している。撮影機材である高画質のカメラが小型化して、なおかつ低価格となった。これが大きい。一方でネットフリックスなどの配信会社のもとで、海外でもドキュメンタリー映画がヒットするケースが増えている。伊藤詩織の「ブラック・ボックス・ダイアリーズ」などは海外の評価が先行した。

そんな中で昨年末公開の「それでも私は」が大ヒットしている。観客動員12万人、興行収入2億円を超え、



まだ伸びることは間違いない。誰だろう、「私」とはオウム元教祖・松本智津夫の三女、松本麗華だ。死刑をテーマにしている長塚洋が監督で、長塚は撮影直前に亡くなった母親の保険金を製作に突っ込んでいる。この着想に自信があり、賭けたいと思ったのだろう。自分がどんなに生き辛い状態なのか世の中に知つてもらいたい、が三女出演の動機。16歳の時教団を離れているが、スポーツジムに通っていると、「どのお金でスポーツジムに通っているんだ」と苦情が入り退会。空手教室では、あなたが来ると弟子がみんな辞めるから「お願い、来ないでほしい」といわれる。それを乗り越え、83年生まれの彼女は文教大学臨床心理学科を本名で卒業し、インストラクター、カウンセラーとして活躍している。富山での上映が待たれる。

もう一作を紹介したい。「どうすればよかったか？」。両親の影響から医師を志し、医学部に進学した姉がある日突然、事実とは思えないことを叫び出した。統合失調症が疑われたが、医師で研究者でもある父と母はそれを認めず、精神科の受診から姉を遠ざけた。その判断に疑問を感じた弟の藤野知明（監督）。両親に説得を試みるも解決には至らず、わだかまりを抱えながら実家を離れた。このままでは何も残らないと、映像制作を学んだ藤野が20年にわたってカメラを通して家族との対話を重ね、社会から隔たれた家の中と姉の姿を記録した。いわば私小説だが、動員が15万人を超えている。



ヒットの背景に、現実がフィクションを超えている、ということ。

ペンを捨てて、カメラを持とう。



《コラム》沖縄のいま（37）

沖縄タイムスが「平和の礎(いしじ)」全刻銘者 24万2567名の氏名を紙面に掲載

小原 悅子

「沖縄戦80年」の今年は、糸満市摩文仁の「平和の礎(いしじ)」建立から30年の節目でもある。「平和の礎」は、＜…世界の恒久平和を願い、国籍や軍人、民間人の区別なく、沖縄戦などで亡くなられたすべての人々の氏名を刻んだ記念碑として…＞（沖縄県HP）、1995年大田昌秀知事の時に建設された。同じく平和祈念公園内にある「県立平和祈念資料館」と一対のものだという。

「魂魄(こんぱく)の塔」と「平和の礎」

沖縄戦で亡くなった多くの方の遺骨は、今もって遺族のもとへ帰っていない。「平和の礎」ができるまでは、沖縄住民は糸満市米須の「魂魄の塔」へお参りした。「魂魄の塔」は、戦後、米軍によって帰村を許されず、代わりに糸満市の米須に移住させられた真和志村（現那覇市）の住民が、米須一帯の「道路、畑の中、周辺いたる所に散乱していた」（碑文）戦没者の遺骨を収集して建立した。真和志村民は金城和信村長と共に散乱する遺骨を収集し、石で囲んで、戦没者を慰靈した。当時、糸満高校真和志分校の校長だった翁長助静さん（翁長雄志前知事の父）が「魂魄の塔」と命名。米軍の許可を得て

の遺骨収集だったという。

「魂魄の塔」に納められた遺骨の多くは、1979年に摩文仁の国立沖縄戦没者墓苑に移されたそうだが、慰靈の日前後には今も遺族が「魂魄の塔」を訪れる。

私は今年、8年ぶりに「魂魄の塔」を訪れた。慰靈の日から1週間経っていたが、おじいちゃんを中心とした4世代のご家族がお参りにみえていた。平御香（ひらうこー）をたき、お花や飲み物を供え、全員でうーとうーとうされていました。現在でもここは、沖縄戦戦没者のお墓なのだ。

そして、沖縄戦で亡くなったすべての遺族のもう一つの心の拠りどころが「平和の礎」である。＜沖縄戦などで亡くなられた国内外の20万人余のすべての人々に追悼の意を表し、御靈を慰めるとともに、・・・世界の恒久平和を祈念する＞（沖縄県HP）との建立時の趣旨を超えて、人々は「平和の礎」に刻まれた戦没者の名前の前にひざまずく。礎に刻まれた親族の氏名を手でなで、のどが渴いたしようと水をかけ、氏名が刻まれた礎の下に花や飲み物を供えて手を合わせる。



←「平和の礎」刻銘者を掲載した沖縄タイムス紙面全52枚を展示=那覇市タイムスピリにて
(2025年6月30日沖縄タイムス紙面より)

遺骨が納められている国立沖縄戦没者墓苑ではなく、「魂魄の塔」や「平和の礎」に手を合わせる沖縄の人々の心は、戦争を起こし地上戦を招き、沖縄を本土防衛の時間稼ぎの捨て石にした國の仕打ちへの偽らざる眞情ではないかと、私には思える。

沖縄県は今年、平和の礎刻銘者インターネット検索システムを構築し、公開した。以下から検索できる。
平和の礎 戦没者の刻銘案内
<https://heiwaishiji.pref.okinawa.jp/>

「平和の礎」には今年6月時点で242,567名の氏名が刻銘されている。富山県関係刻銘者は882名。クワディーサー（モモタナモ）の木々が心地よく繁る下を屏風のように並ぶ「平和の礎」の間を歩くと、沖縄戦没者の人数の多さを実感する。

沖縄タイムス紙が全刻銘者氏名を掲載

沖縄タイムス紙は6月10日から22日にかけて、毎日4面ずつ計52面にわたり、「平和の礎」の全刻銘者氏名を掲載した。<その名を呼び、手に触れなでて、

誓いを立てよう。新たな戦争遺族に、私たちはならない。>と宣言する。

「台湾有事」が喧伝され、九州から琉球弧が軍事要塞化、ミサイル基地が造られる今、「新たな戦前」に向かう危機感がある。もう二度と戦争遺族にならない。沖縄県民の決意が表れている。

沖縄タイムスは、<高齢で礎に足を運べない遺族が増えている。遺骨が見つからず、どこで亡くなったかもわからない遺族にとって、礎に刻まれた名は心のよりどころ。地元紙として、何とかして高齢の遺族が刻銘に触れる機会をつくれないかと考えた>と掲載意図を示す。沖縄の新聞社として「沖縄戦80年」「平和の礎30年」を記録する快挙だ。

那覇市の沖縄タイムスビルでは、刻銘者名を掲載した紙面52面を並べて展示した。展示した紙面の背景に「月桃の花」と「平和の礎」の風景写真が浮き出る仕掛けがあった。

辺野古新基地工事ゲート前でプラカード掲げ座り込み

6月末、小原さんは1週間にわたり、5度目になるという沖縄の旅をした。沖縄戦ゆかりの地や現在の「沖縄問題」の象徴である辺野古新基地工事地などを訪ねた。6月26日と27日は辺野古新基地阻止行動に参加。その阻止行動参加の様子を紹介する。

小原悦子

6月26日と27日の両日、辺野古新基地工事が強行されるキャンプ・シュワブで、土砂・工事用資材搬入を阻止する座り込みに参加した。搬入は1日3回(9時、12時、15時)行われている。両日とも、12時の搬入の座り込みに参加。座り込み抗議が始まってから4008日目と4009日目だった。

市民は搬入30分前から資材搬入用ゲート前に座り込む。26日の参加者は約20人。既にティケイの警備員は横一列に並んでゲート前に人間の壁をつくっていた。「国策はまちがえる」「辺野古大浦湾 やんばるの森 壊すな！平和に生きる権利、憲法」と印刷したA3のアピール用紙を持参し、掲げた。

名護市側の坂下から生コン車が上って来て列をつくる。12時を過ぎると、機動隊が出てきて私たちの前に並ぶ。指揮官の合図で市民一人に3~4人がかりで、「移動してください。自分で移動できますか」と一応は声をかけ、強制排除する。イスごと運ばれた。市民の排除が終わると、生コン車の列がゲートを通過。しかし、これで終わらない。

生コン車の後にダンプトラックが三々五々やってくる。数台がゲートに入っても機動隊の規制は終わらない。五月雨式搬入は午後1時過ぎまで続いた。その間ずっと狭い歩道に閉じ込められ、アピールボードを掲げて抗議する。沖縄の陽射しは強い。

午後は瀬嵩の浜から大浦湾側を確認した。ちょうど26日は大潮で干潮時に遭遇。ごつごつと出っ張った大きな岩々には乾いた泥がこびりついている。以前は、きれいな岩肌だった。大浦湾の海底に泥が沈殿し、濁ってきているのだ。

同行のヤマヒデさんの説明では、台風を理由に軟弱地盤改良のサンドコンパクションパイル船(SCP)6隻すべてが6月9日ごろから大浦湾からいなくなった。それ以来、戻ってきていない。また、A護岸の鋼管矢板の打設も止まっている。防衛局はB27地点で追加の土質調査をしていたが、その結果を公表していない。なにか裏がありそうだ、と。

名護市在住のフォトグラファー山本英夫さんが26日キャンプ・シュワブゲート前を取材。大浦湾に同行し、ブログ「ヤマヒデの沖縄便りⅣ」にあげてくださった。参照していただきたい。

【拡散願います】真夏の辺野古－工事現場を覗く(20250626-①)
4 大干潮の大浦湾だった(20250626-②)



瀬嵩の浜から長島方向を見る